



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カルケドン公会議のキリスト論
Author(s)	荒木関, 巧; Arakizeki, T
Citation	基督教学, 16, 19-20
Issue Date	1981-07-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46396
Type	journal article
File Information	16_19-20.pdf



カルケドン公会議のキリスト論

荒木 関 巧

ニカイア公会議はグノーシス派が用いていたホモウジ
オスということによって、イエスが父なる神と同本質
であることを宣言した。それはキリスト教のヘレニズム
化ではなく(A. Grillmeier, *Mit ihm und in ihm*, Frei-
burg, 1957, 528-554, マルクス、「古代キリスト論の意味
を現代に問う」、カトリック研究三六、二二—四八)、キ
リスト教とヘレニズムの二つの文化の相互関係作用(=relation)の所産であった。

同じ作用がカルケドン公会議にも見られる。神のみを
強調する信仰主義(単性説)と人間中心主義(ネストリ
オス派)、いいかえると、プラトン哲学の影響を受けた
アレキサンドリア学派とユダヤ教やアリストテレスの影
響を受けたアンチオキア学派との対立、さらに、それら
の動きに西方ラテン教会のレオの思想が加わって、「二
つの本性、一つのペルソナ」の公式が生まれたのであ
る。公会議はネストリオスが用いていたプロソポンとい

うことはレオの概念規定(ペルソナと本性との区別)
を用いて正統化し、或る意味で、名譽回復させたとい
える。

プロソポンについてのネストリオスの考えを要約する
と次のようになる(A. Grillmeier, *Jesus, der Christus
im Glauben der Kirche, I, Freiburg, 1979, 707-726*)。

現実存在しているものをフィジス(実在)又はウ
ジア(存在)という。実在は完全な実在と不完全な実在
にわけられる。

靈魂と肉体とは不完全な実在であるが、両者が一致し
て成り立つ人間存在は完全な実在である。

キリストには神と人間との二つの完全な実在がある。
二つの実在が結合して、ただ一つの「神の子」が存在す
るが、その場合、神と人間の特有の表現様式(プロソポ
ン)を失うことがない。特有の表現様式や特色を失うな
ら、神と人間の二つの実在は混合されてしまい、区別で
きなくなる。キリストにおいて、二つの完全な実在が対
立したり分離したりせず一致しているのは、「一致の
プロソポン」による。一致のプロソポン(主体、ヒボス
タージスともいう)によって、神様は人性に、人性は神
性に相互浸透し、それぞれ、他方の本性的表現様式を用

いることができる。

ネストリオスは、人性や神性の本性的表現様式に関して、ウジア（存在）、フィージス（実在）、完全な実在（ヒポスタージス）、プロソボンとことばを用い、神性と人性の一致点であるペルソナを表わすために、同じことばを違う意味で用いている（主体＝ヒポスタージス、ペルソナ＝プロソボン）。

このような両義的使用をレオは改め、ペルソナと本性との区別を導入した。

本性 (*natura*) は行為の担い手や具体的実在を意味せず、働きかけの原理 (*principium quo*) であり、それによって、神は神として、人間は人間として、行動することができ、神を人間から、人間を神から区別するものである（竹山昭、レオのキリスト論、——「トムス」の視点、及び両本性——、カトリック研究二四、五二—七八）。キリストには、神と人間の二つの本性があり、それらは一つのペルソナによって一致している。一致はペルソナのレベルにおいて生じ、相違は本性のレベルにおいて生じる。

レオの仲介によって、キリストは神であるというキリストの伝統的中心思想が、人間性と神性との相違を強調す

るネストリオスの思想と調和・統合した。

二つの異なる文化との出会いを求める努力は、ラーナーにおいてはスコラ神学とハイデッガーの実存主義との相互関係作用の所産としての「超自然的実存規定」のキリスト論として (K. Rahner, *Grundkurs des Glaubens*, Freiburg, 1976) 八木誠一においては滝沢克巳と同じく、キリスト教と仏教との出会いとしての「統合への規定」のキリスト論に見られる（八木誠一、仏教とキリスト教の接点、法蔵館、一九七五）。

人間性を強調する最近のキリスト論に対して、「神にして人間」を宣言したカルケドン公会議の公式は支えであり戒め (*criterium*) である。